

杉森久英

昭和の 怪物たち

● 河野一郎
● 津村重舎
● 武見太郎
● 土光敏夫
● 永田雅一
● 出口王仁郎

河出文庫

昭和の怪物たち

杉森久黄



笹川良一記念文庫 *kawada junko*

河出書房新社

財団法人日本科学協会

昭和の怪物たち



著者 杉森久英

一九八九年五月二五日 初版印刷
一九八九年六月二日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-32-1
☎〇三-四〇四-八六一 (編集)
〇三-四〇四-一二〇一 (営業)
振替口座(東京) 〇-10802

デザイン 粟津潔

印刷・製本 凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©1989 Printed in Japan
ISBN4-309-40240-2



kawade bunko

河出文庫

昭和の怪物たち

杉 森 久 英



kawade bunko

河出書房新社

目次

権力への闘争	河野一郎	7
士魂商才記	津村重舎	55
正義と孤独	武見太郎	99
挑戦する経営者	土光敏夫	137
日本一の大ラッパ	永田雅一	163
風雲を呼ぶ男	出口王仁三郎	223
あとがき		275

昭和の怪物たち

権力への闘争 河野一郎

長男の使命

河野一郎は生れつき闘志にあふれた男で、人の先頭に立たなければ気がすまなかった。

早稲田大学に在学中、彼は競走部に入って、マラソンの練習に没頭したが、いよいよ卒業という年、学生として最後の運動会に、どうしてもマラソンで一着を取ろうと決心した。しかし、いっしょに走る仲間に、彼より早くて、勝てそうもないのが二人いる。一人は実の弟の謙三（現在参議院議長）で、もう一人は縄田尚門（のち読売新聞記者）という男である。謙三は彼より三つ下で、同じ早稲田の商科にいるが、走る方は兄より早かった。縄田は後輩である。そこで年長者の威光で、

「こんどのマラソンでは、おれが勝つことにする。何しろこんど卒業で、最後の花を飾らねばならんからな。おれより先に走ってはいかん」

と申し渡した。二人はあきれて、

「そんなばかな話があるもんか」

といつて、聞き入れようとしなない。

当日、いよいよマラソン競走が始まると、二人は一郎にことわりもせず、先に立ってどんどん走っていった。

マラソンのコースは、早稲田の戸塚球場を出て、目白の坂を登り、学習院の前を通って練馬まで行つて帰ってくるという十マイルである。彼は二人の後姿を見送りながら、

「ようし、奴等がその気なら、こつちにも考えがあるぞ」

と、目白の先までゆくと、それ以上走ろうとせず、二人の帰ってくるのを待った。

やがてむこうに二人の姿が見えると、一郎は逆の方へ走りだし、運動場へ入ると、一着のような顔をして、賞品を受け取ってしまった。

二人は憤慨して、しきりに文句をいったが、

「おれは一着だ。その証拠には、賞品をもらったじゃないか。一着でない者に賞品をくれるはずがない」

といつて、相手にしなかった。

こういう性質は、生れつきのことが多いが、環境によって助長されることもすくなくない。戦前の日本は長子相続で、長男にはいろいろの特権が与えられていたから、次男三男に対して暴君的に振舞うのが普通だった。このマラソンの挿話にしても、一郎と謙三の地位が逆だったら、およそ考えられないことである。

早稲田に在学中、一郎と謙三はどこへゆくのもいっしょだった。大学へ行くのも帰るのも、マ

ラソンの練習も、いつもいっしょである。それで、

「なんと仲のいい兄弟だろう」

と評判になったが、実は、二人の金は全部一郎のポケットに入っているのです、弟ひとりでは、コーヒー一杯呑めないのです。実家からは二人分の小遣錢を一括して、兄のところへ送ってくるのだが、兄はそれをみな自分であずかっていて、

「なんでも、ほしい物があつたら言え」

というのだが、あらかじめ弟の分を分けてくれるわけではないのだから、いつも兄のそばにくっついていないと、何ひとつ買えないのであつた。

河野家は神奈川県足柄下郡豊川村成田（現在は小田原市）の農家であつた。大体の位置は東海道線鴨宮駅から二キロ、国府津、小田原から四キロというところで、西は酒匂川^{さかわ}をへだてて箱根連山、富士を眺め、北には丹沢山塊がそびえ、東北には曾我兄弟で有名な曾我の里から曾我山につらなり、南は太平洋がすぐそこにひろがっている。

河野家は土地の名家であつた。父治平は県会議員を勤め、晩年には県会議長に推され、中野正剛とも親交があつたという典型的な地方政治家であつた。だから一郎が政治家になつたのは、アヒルの子がアヒルになるように、自然な成り行きであつた。そして、一郎の没後は、その次男洋平（長男は病没）がその地盤をついで、やはり代議士になっている。

河野家がこの地方の名家になつたのは、一郎の曾祖父次郎右衛門の代からである。この人は河

野家のある成田と川ひとつ隔てた栢山^{かやま}部落に住む二宮尊徳の弟子で、また、その妻（つまり一郎の曾祖母）は尊徳の妻の妹という関係でもあった。そのころ二宮尊徳の名は日本じゅうに聞えていて、あちこちの藩から招かれたが、そういうとき、次郎右衛門は供を命ぜられて、腰巾着^{こしぎんちゃく}のようについてあるいた。

尊徳は次郎右衛門にむかつて、

「勤勉と儉約が第一じゃ。せつせと働いて、何がなんでも金をためなされ。金がたまったら、土地を買いなされ。土地ほどありがたいものはない」

と教えた。次郎右衛門はこの教えを守って、働いて金をため、土地を買ったので、近郷きつての地主になり、一郎の父の代には政友会の地方政客の巨頭になった。

こういう家の長男に生れた一郎は、幼いときから、わがままいっぱいに育てられた。彼は将来、河野家の家長として、財産と土地を管理し、地方の民衆の先頭に立って、幸福と繁栄の道を歩まねばならぬ男である。あらゆる者は彼の命令に従わねばならないし、そむく者があつてはならない。

彼はひとりだけ特別待遇で、親戚の者、たとえば叔父、叔母からも「一郎さん」と、さんづけで呼ばれた。弟や妹たちは呼び捨てである。

こんなふうに着てられたので、彼はあらゆる場合に人の先頭に立たねば気がすまなかった。マラソンで一位にならねばならないなど、ふつうの男だったら正気の沙汰でないが、彼の場合、二位以下を走る自分の姿は考えられないのである。たとえ規則に違反しようが、信頼を裏切ろうが、

奸計を用いようが、どうしても先頭に立たねばならない。それが彼の信念であり、使命であった。だから、彼のそばに弟がしょっちゅう付き従っていても、ふしぎではない。封建的な家族制度のもとでは、長男は将来の家長で、次男以下は家来であり、従者であり、奴僕めぼくである。どこへゆくにも、家来をつれてあるくのが、家長の威厳を増す所以ゆえんなのである。

家族や親戚の間だけではない。村内でも、近郷近在のどこへいっても、彼は河野家の長男だということ、特別の待遇を受ける。今は子供でも、いまに大きくなれば、名家の跡つぎとして、政界へ打って出て、県議員になるか、代議士になるか、本人の腕次第では、大臣になるか、予測できない存在である。そこいらの腕白小僧と同列にあつかうべきではない。

本人も、もちろん自分に寄せられた期待と希望はちゃんと承知していて、それにふさわしいような役割を演ずることに抜け目はなかった。彼は小学校のころ、年のうち半分くらいは母の実家（近隣の曾我村にあつて、やはり名家だった）にあずけられて、そこから小学校へかよっていたが、夜になるとふらりと遊びに出て、七、八軒先の酒屋の店へ出かけた。そこには村の大人たちが集まって、碁、将棋をやったり、コップ酒をあおりながら、世間話に花を咲かせたりしていた。いわば村の社交クラブ、あるいは世論形成の広場である。

そこで彼はみんなから、何となくチャホヤされる。いまに親の跡をついで政治家となり、彼等に君臨するにちがいないからである。

こうして彼は、物心ついたときから、自分が特別の人間で、どこへいっても先頭に立たなければならぬ男だという意識を植えつけられて成長した。

河野一郎が早稲田に入って二年のとき、報知新聞の主催で、東京―箱根間の駅伝マラソンがおこなわれることになった。参加校は早稲田、慶応、明治、高等師範の四校である。

一年目と二年目は高師と明治が優勝したが、三年目には河野が主将に就任して、選手をきびしく統制した結果、早稲田を優勝にみちびいた。

続いて、四年目も早稲田を優勝させた。

この際、河野はいつも小田原―平塚の区間を受け持ち、ほかの者の走ることを許さなかった。この区間は彼の出身地である。郷里の人々の目に、彼の華やかな武者ぶりを印象づけたかったのである。

小田原では、今日が箱根駅伝だというと、後輩の中学生などが駆け出されて、酒匂の橋まで迎えにゆき、河野のうしろから激励の言葉をかけながら、いっしょに走った。

これについて、うがった見方をする者は、彼が将来郷里から立候補するときのことを考えて、顔を守るつもりでやったのだらうと言っているが、そこまで深く考えてやったことかどうか疑わしい。

河野自身は、そのころ代議士になるつもりは毛頭なく、新聞記者で身を立てるつもりだったといっている。彼が小田原―平塚間を走りたかったのは、この区間が平坦地で、比較的走りやすかったのと、彼は選手と監督を兼ねていて、ほかの選手のように充分練習ができなかったから、この区間を選んだのだというのである。

おそらく、それは本当であろう。しかし、選挙の事前運動という功利的な目的はないにしても、早稲田大学の花形選手として、大勢の後輩をうしろに従えて、颯爽さつそうと走ってゆく勇ましい姿を、郷里の人々の目にさらしたいという意欲は、押え切れなかったであろう。ある人は、

「マラソンするときも、親分風をふかせないと気のすまない男だった」といっている。

政治家は困る

小田原中学を卒業して、最初に彼が受験したのは、早稲田の理工科だった。ちょうど大正の終りころに当り、日本の工業化が急速に進められていて、理工系全盛といっていいころだったので、彼も鉱山学をおさめて、この風潮に乗ろうと思ったのである。しかし、不合格だった。

一年予備校にかよって、もう一度受験したところ、大学から、

「点数がすこし不足して、理工科へは入れることができないが、ほかの学科なら、何学科を望んでもいい」

という通知が来たので、政治科へ入学した。

しかし、彼の母は政治科へ入ることに反対だった。主人が政治家になると、家族の者がどんなに苦勞しなければならぬか、彼女は身をもって知っている。刑務所へはいることだって、覚悟しなければならぬ。現に、一郎が最初に早稲田へ志望するとき、父は選挙違反で入獄中だった。